

3 月度例会 グループワーク①当日の内容

【議事録】四日市青年会議所 グループワーク①(テーブル A～E)

テーブル A: 小川先輩

Q1. 現役会員のときの記憶で一番記憶に残っていること、楽しかったことは何ですか。

A. 委員長を務めていた時代が最も印象に残っています。困難もありましたが、達成感がありました。未経験であったからこそ楽しさを感じることができました。特に、会員交流渉外委員会での活動が印象的で、例会出席率 100%の達成に向けた取り組みも記憶に残っています。

Q2. 卒業されて 10 年が経過しましたが、JC に対する想いに変化はありましたか。

A. JC は「大人の学び舎」であり、礼儀、社交性、仲間など多くのことを学びました。今の自分を形づくった原点だと感じています。

Q3. 10 年前の四日市青年会議所と比べて今の四日市青年会議所の変化した点、変えるべき点は何ですか。

A. 人口減少が大きな課題です。地域の魅力を高め続ける運動の継続が必要です。

Q4. 在籍当時と比べて、緩やかになったと感じる点がありますか。

A. セレモニーの質が低下したように感じます。かつては「四日市といえばセレモニー」と言われるほど重視されていました。理念を大切にしながら、継続的な取り組みが求められます。

Q5. 入会当初、セレモニーについてどのように感じましたか。

A. 英語での内容に戸惑いを覚えました。意味を正しく伝えることが重要であり、「奉仕」「修練」「友情」の順序を間違えないことも大切です。

Q6. サルビア基金の成り立ちについて教えてください。

A. 不良が多かった時代に、健全な青年の活動としてスタートした背景があります。

Q7. 60 周年に理事長をされていた当時の会員拡大活動に対する思いや工夫について教えてください。

A. 「若さあふれる」をテーマに掲げ、継続的に会員候補者へ働きかけ、3 年間は在籍してもらえよう工夫を重ねました。

Q8. 60 周年の理事長を務めるにあたってのご苦労について教えてください。

A. 多くの仲間に支えられながら、物事の背景や目的を意識するようになり、度胸や技能の面でも成長を実感しました。

Q9. 一番印象に残っている事業は何ですか。

A. 会員交流渉外委員会での委員長時代です。会員のプロフィール冊子の作成や、都内で実施した大感謝家族例会が特に印象的でした。

Q10. 60 周年の理事長をしていたときの当時の覚悟について教えてください。

A. 「死ぬ気の覚悟」で臨みました。節目の年においては、過去を振り返り、現在を見つめ、未来を描くことが重要であると実感しました。

Q11. 卒業まで JC 活動に対するモチベーションを維持する方法について教えてください。

A. 入会当初はやや斜^{シヤ}に構えていましたが、続けるうちに仲間ができ、次第に四日市のために尽力したいという気持ちが芽生えました。

テーブル B: 西尾先輩

Q1. なぜ紹介ではなく、自身の意思だけで青年会議所に入会しようと決意されたのですか。

A. 当時 20 代で、同世代の仲間と切磋琢磨できる場は JC しかないと感じ、自分を変えたいという意欲もあり、自発的に入会しました。

Q2. 歴任された中で、特に思い出深い委員会がありますか。

A. どの委員会にも思い出がありますが、特に委員長を務めた際にリーダーシップを発揮する機会があり、60 周年記念委員会は大きな成長に繋がりました。

Q3. 60 周年記念委員会の委員長として、やって良かったと思うことは何ですか。

A. 「過去から未来へのつながり」をテーマに、各委員会にブースを割り振り一体感を高めました。メンバーと多くの時間を過ごし、絆を深められたことが喜びです。

Q4. 理事を務めて苦労したことはありますか。

A. 青少年育成委員会では高校生を対象とし、考え方が大人に近い層に学びを提供する難しさがありました。絆やつながりの大切さを共有できたのは大きな成果です。

Q5. 記念式典準備においての苦労について教えてください。

A. 来賓やシニアクラブ会員など多方面への配慮と、委員会内での周知徹底が必要でした。失礼のないよう、シミュレーションと準備に徹しました。

テーブル C: 多田隼人先輩

Q1. 60 周年当時、会員拡大にどのような工夫をされましたか。

A. 宗教的な印象を与えないよう「裏側を見せる」説明を行い、事業準備や現場を見せることで JC の実態を理解してもらう工夫をしました。

Q2. 会員が退会しないために心がけていたことは何ですか。

A. 見本となる先輩の姿勢や身だしなみに憧れを持たせ、継続のモチベーションを高めるよう努めました。

Q3. 委員会運営で大切にしていた点は何ですか。

A. 委員会は1時間で終え、その後に食事や交流の時間を設けて人間関係の構築を図っていました。

Q4. JCの経験が仕事に与えた影響はありますか。

A. 名刺交換をはじめ、信頼性の向上や人脈形成など多くの場面で役立ちました。

Q5. 印象に残っている地域事業について教えてください。

A. 青少年事業「親を見て子が育つ」は、参加者と保護者双方に気づきを与えられた意義深い事業でした。

Q6. 会員拡大に必要なことは何ですか。

A. 継続事業と広報力の強化が必要です。JCの価値を言語化し、社会に的確に伝えていく努力が求められます。

テーブルD: 生川雄規先輩

Q1. 2019年度の拡大活動で意識された点は何ですか。

A. 候補者や新入会員に対して目指す人物像を問い、助言を行いました。また、推薦者である社長や親への理解促進も重視しました。

Q2. 拡大活動で実施されたことは何ですか。

A. 異業種交流会(飲み会形式)を実施し、参加しやすく、自分たちも行きたくなるような場づくりを心掛けました。

Q3. 2012年入会当初と今の雰囲気の違いはありますか。

A. 当時は体育会的な雰囲気で、上下関係が厳格でした。現在は人数が減少しているため、手法の工夫と結束力の強化が求められていると思います。

Q4. 特に印象的だった役職とその影響はありますか。

A. 委員長の経験が特に良かったです。片付けなど基本を大切にする姿勢が自分を変え、謙虚な心を学びました。

Q5. 副理事長の役割についての考えを教えてください。

A. 理事長と委員長をつなぐ橋渡しの役割であり、意見の対立から学び、成長につなげる機会でもあります。

Q6. 思い出に残っている事業はありますか。

A. 特定の例会よりも、普段の活動を通じて築いた人間関係や絆が最も大切な財産となっています。

テーブル E: 大谷先輩

Q1. 「1 万個の積み木で四日市のまちをつくろう」という事業について教えてください。

A. 実際に 1 万個あったかは定かではありませんが、副委員長が廃材を集め、家族でやすり掛けを行いました。工夫次第で実現可能であると実感しました。

Q2. あすなろ鉄道を守る例会について教えてください。

A. 鉄道職員の話を聞き、有志 30 名で実際に乗車しました。例会事業というよりも、日常的な声かけが効果を生んだと感じています。

Q3. 最もしんどかった役職は何ですか。

A. 専務理事が最も大変でした。調整業務が多く、肉体的にも精神的にも厳しい役職でしたが、多くの学びがありました。

Q4. コロナ禍に理事長を務められて、一年を終えたときどのようなことを感じましたか。

A. 無力さを感じました。例会は中止を基本としましたが、準備済みの例会はリモートで実施し、ガイドラインも策定しました。

Q5. 会員減少への対応として、SNS 発信についてどうお考えですか。

A. 情報発信に時間がかかりがちで、スピード感到に欠ける面があります。ガイドラインを整備し、個人での柔軟な発信を促す必要があると感じています。